

1

説明文は茂木健一郎『意識とはなにか』(筑摩新書、2003年)から引用した文章を出題しました。前半では誰もが知っている有名なエピソードである「ニュートンのリンゴ」を例に挙げながら近代科学の発展が普遍的法則を求めることで発展したことを説明し、後半ではその何者をも特別扱いしないことで発展してきた科学が特別扱いせざるを得なかった人間の意識について考察しています。設問では筆者の主張を正確に捉え、各段落の構成や文脈のつながりをしっかり把握することが必要です。

問一

はじめに「科学とは」とありますので、本文中にこの語句があるかどうかを確かめるのが第一です。次にA・Bともに字数指定がされていることもヒントになります。39行目に「科学とは」とあることに注目します。「科学とは、世界の中にあるさまざまなものを特別扱いするのではなく」とあり、「するのではなく」は「せず」と同じ意味ですから、Aを指定字数で抜き出すと「『さまざまなものを特別扱い』せず」となります。Bに続く文は「を求める営みである。」ですから、40行目を十字で「普遍的に成り立つ法則」と抜き出します。

問二

傍線部分は異なる物体を同じ法則で理解しようとしたニュートンの発想を示しています。設問の要求はその具体例を本文中から探し出せというものです。ここでは具体例の役割を考える必要があります。具体例は事象を詳しく説明するために用いられるものですので、ニュートンの発想の説明がなされている第3段落、第4段落に着目します。すると19行目、20行目に「一つの法則」の具体例が示されています。これを指定字数である三十字以上三十五字以内で抜き出します。「最初の五字を答えなさい。」という設問の指示も見落とさないようにしてください。

問三

傍線部に続いて「哲学的ゾンビ」という聞き慣れない概念が述べられていますが、65行目からは再び本来の「科学」の話題になっています。設問では主観的体験が特別扱いされているとは「どのようにされることですか」と受け身の形で尋ねられています。本文では受け身の形で主観的体験は述べられていませんので注意が必要です。指定されている主語は「主観的体験が」ですので、これがどのように扱われているかを探します。72行目以降に「科学は脳を含む物質の客観的ふるまいと私たちの主観的体験を切り離し、前者(物質の客観的ふるまい)のみをその(科学の)探求の対象とし、後者(主観的体験)の存在を無視してきた。」とあります。ここを「主観的体験」を主語にして、25字以内でまとめ

ると「(主観的体験が)物質の客観的ふるまいと切り離され、無視されること。」と受け身になります。

問四

傍線部の次の段落、最後の部分67行目から69行目にかけて、「だからこそ、日々朝の目覚めとともに<私>の意識がそこに生まれるという明白な事実にもかかわらず、科学は意識の存在を無視してきた。」とあります。設問では、科学が人間を意識など持たない存在として扱ってきた理由をきいていますので、意識を無視することが記述されたこの部分に着目します。「だからこそ」の前にその理由が書かれていると推測できますので、それを整理すると64行目から65行目には「人間が意識を持つこと、主観的体験を持つこと自体が想定外」という内容が、65行目から66行目には「科学的立場からすれば、脳の中の神経細胞の活動が意識を生み出すことなどない方が好都合」という内容が書かれています。この2点をまとめれば解答になります。なお設問に「本文の表現を用いて」とことわってありますので、本文の表現を最大限利用することが肝要です。

問五

空欄補充の問題です。(あ)はすぐ下に「人間のよう」とありますので、「まるで~のように」という比喩表現であると考えられます。(い)は前後の文章の内容から判断して逆接の接続詞を入れることが望ましいと考えられますので「しかし」が適切な語句になります。

問六

挿入文のはじめにある「ここで」は「この場合は」という意味です。続けて「『哲学的ゾンビ』とは」の説明になります。46行目でいきなり「『哲学的ゾンビ』と呼ばれる概念」とありますので、意味の解説が必要と判断できます。したがって正解は《イ》となります。

問七

漢字の書き取りです。(ア)は「遠心力」、(イ)は「要素」、(ウ)は「喜」、(エ)は「原理」、(オ)は「目覚」となります。

問八

本文の内容に合うものを探す問題です。正解はイとなります。アは後半の「現代において」以下が誤りです。ウははじめの「人間を」以下と「現代科学は」以下が、かみあっていません。エは後半の「この考えを捨て」が誤りです。

2

物語文は伊藤たかみ『ミカ!』(文春文庫、2004年)から出題しました。引用されている場面では男の子のような言行をするミカと双子のユウスケに関する噂を二人の親友であるコウジが流していたことをユウスケが問いつめ、その事実が発覚した際のやりとりが描写されています。登場人物の心情の変化を読み取っていくことが大切な作業となります。

問一

「大事な用事」の内容は16行目から31行目までです。ここで描写されていることは26行目「そういうわさを、コウジが流しているかもしれない」ことの確認です。「そういうわさ」とは16行目の「ぼくとミカのことを変に言う」ですから、これらの要素をまとめて、設問の要求にある指定字数以内でまとめれば解答ができあがります。

問二

「のどがカラカラに乾く」のは気候のせいではなく、心理的な要因からです。これは心理的な「緊張」を表している表現と判断することができます。私たちの日常の経験から判断材料をそろえることも大変大切なことです。正解は「緊張」が述べられているイとなります。

問三

ユウスケがコウジをゆるせない理由は68行目～70行目と77行目です。友人と思っていたが、「嫌われていた」「だまされていた」と思い、それがゆるせないということです。このことを指定字数以内でまとめれば解答となります。ポイントはコウジが自分のことを「嫌いだった」とユウスケが思ったことと、ユウスケがコウジに「だまされていた」と感じたことです。

問四

コウジがミカの前で「言えない」理由は86行目以下でコウジ自身が語っています。また加えて81行目の「で、ミカは女の子やから好きや」も利用して指定字数以内でまとめれば答えになります。ポイントは、コウジは「ミカを女の子として好き」である、それゆえ好き嫌いの感情を出すことが「恥ずかしい」し、「カッコ悪い」と考えている、となります。

問五

解答の手がかりはコウジ自身が直後の91行目以下で述べています。92行目の「ミカがほかの男子としゃべったたら、なんでかわからんけど腹立つ。」から「やきもち」、91行目の「なんかかわからんけど、好きやから嫌いになるときもあるんや。」から「好きな者

にかえって反対の行動を取ってしまう」が照合していますので正解はウとなります。アは前半、イは後半、エは全体に不適切な記述があります。

問六

いずれも日常生活で用いられている慣用句です。

一がイ、二がウ、三がオ、四がア、五がエとなります。

問七

登場人物の人物像の説明としてふさわしいものを選ぶ問題です。

アは「子供の考え方から大人の考え方へと成長し」が不適切です。これは本文から読み取ることができません。

ウは「自らの考えに常に自信を持ってふるまっている」が誤りです。64行目～67行目には筋道からすればコウジを許してやらねばならない、でも許せないという葛藤が描かれています。

エは「他人の立場を第一に考えている。」が誤りです。本文中に描写されていません。

イは本文中のユウスケの言行をよく押さえた適切な選択肢です。したがって正解はイとなります。